マーシャル方面遺族会
（旧クェゼリン方面戦歿者遺族会）
郵便番号 154
世田谷区野沢3—11—3
電話 東京（421）3614
振替口座東京93487番
編集兼発行人　浮田信家

「クェゼリン」島の墓参

徳原徳子

毎年五月三十日はアメリカではメモリアル・デーと云う祭日で、戦歿将兵記念日として一般に公休日です。もとは南北戦争での戦歿者の記念日でしたが、今日では総て戦争で歿くなられた方達の霊を弔う日となっています。

去る三十日私達は、久しぶりで日本人墓地にお参りに行きました。私達より一足早く、クェゼリンに住む日本人夫人達が三人、お参りして下さって、お経をあげたり、冷たいお水をかけて下さったりしていました。稲福さんや、その他数人の方々もよくお参りして下さるそうで、墓地はいつ行っても、綺麗になっています。マーシャル諸島、ギルバート諸島で歿くなられた方々の御冥福を心からお祈りしてまいりました。

クェゼリンでは、そのメモリアル・デーを中心に、四日間、毎年カーニバルが催され、大層賑わいます。私達も見に行き、ビンゴだの、小さな賭けごとを致しましたが、どれをやっても、大当りをとりました。お墓参りをしたお蔭かも知れません。

お送り下さった新聞ありがとうございました。ガンナースノットがマジュロまで運び、マジュロからミリトビの船長があづかってクェゼリンにもって来て下さいました。五月の中頃受取りました。昨年九月の新聞でしたが大変興味深く拝見いたしました。稲福さんも読みたいと仰言いましたので、終ったあと差上げました。

八月に日本でお目にかかれるのを楽しみにしています。会の皆様へよろしくお伝え下さいませ。

（在クェゼリン本会篤志会員）

ナウル島慰霊碑建立の日
（右はハリス警察部長）

目次

クェゼリン島の墓参……徳原　徳子(1)
クェゼリン陣中日誌(3)……成田喜代治(2)
ナウル島特集
ナウル島地誌……事務局編(3)
ナウル島戦史……事務局編(3)
ナウル島陣中日誌……四高会(4)
ナウル島の慰霊…佐竹　エス(6)
ナウル島地図……(7)
急いでお聞きしたいこと二ツ……(9)
ウィリアムズ氏書簡
Keith S. Williams …(10)
父の遺品27年ぶりに
戦歴を物語る貯金通帳……(10)
教育勅語謹写奉納の会
……久重　一郎(10)
会員便り
……吉津みどり(11)
……小川　如声(11)
……菅原　ヨリ(11)
……高橋　タキ(11)
……安居　美子(12)
……浜本　米一(12)
本年二月六日の
慰霊祭・定期総会・懇親旅行……(12)
……高見沢一家(12)
……大寺　綾子(13)
……高林　セキ(13)
第6期決算報告と
昭和45年予算……(13)
寄附者芳名……(14)
事務局だより……(16)

マーシャル諸島
クェゼリン陣中日誌 (3)

第六十一警備隊司令兼
第六潜水艦基地隊司令
海軍大佐　成田喜代治

昭和十八年

三月一日（月）　砲台教育査閲及び点検。

三月二日（火）　神社立柱式。午後建築部と会議

神社設立委員を招宴す。

三月三日（水）　大原軍医大尉退庁。父なる病院長逝去、その後を相続するため退役するものである。諏訪丸で予備少尉、主計中尉等来著。藤岡秀一機関大尉来訪。

三月四日（木）　予備少尉等に教育

午後基地隊主兵長葬儀。兵の中に僧侶経歴者が居て読経、私は白隠和尚の座禅和讃を謄写して、参列者に配布し一同唱和す。分隊長（主計長）の希望により司令官の承認を得て、この主兵長の死亡を公務死とした。

三月五日（金）　午前エニエラップカン見張所巡視。僅か数人の兵がキーヨ水道を日夜監視して居るのである。慰問激励のためである。彼等はマーシャル神社建設の仕事に奉仕出来ないからその代りにと勤務の隙に拾い集めた珊瑚の玉石を石油箱に幾杯か神社に寄進したので帰路に之を積んで帰った

三月六日（土）　基地隊排球競技

三月七日（日）　建築部の土俵開き。相撲の後相撲甚句などあり。

三月八日（月）　宣戦詔勅奉読講話「戦争の原因と出撃経路」

三月九日（火）　陸戦教練

真島、山中両中尉等退隊

三月十日（水）　隊務会報

三月十一日（木）　陸戦座学

神社鎮座祭打合せ。藤岡大尉を晩餐に招く。福神丸にて探信儀試験

三月十二日（金）　基地隊の遺骨を杵崎にて送還す。陸戦座学。

三月十三日（土）　午後米国の魚雷について講話。仮入隊者の謝恩演芸会、基地隊にて。

（前線内地間に往返する下士官兵は当島で船待ちをする時は潜水艦基地隊の宿舎（元来潜水艦乗員の休養のために造られて居るもので潜水艦が在港しないと空いている）に宿泊する。便船の都合で相当長逗留になることもある。これらの兵員が出立の前晩あたり基地隊への御礼心で演芸会をやることがある）

三月十四日（日）　探信儀研究会。司令部で映画試写会。

三月十五日（月）　分隊点検、勅諭奉読、講話「天照大神に就て」（マーシャル神社は天照大神を奉祀するつもりである）

三月十六日（火）　警察会報巡邏の件を決定。この日から痔疾堀状が出る。

三月十七日（水）　臥床

三月二十一日（木）　春季皇霊祭遙拝式

マーシャル神社鎮座祭（註四）各隊参拝。昼餐宴、午後余興運動会

これより前数日准士官特務士官の航海術（天測）実習のため監視艇を出動せしめ、併せて本日の魚蝦を採取せしめた。

四月三日（水）　遙拝式。病中無理をして出た。

四月二十三日（火）　九二式魚雷調整場に関する会議

四月二十四日（水）　靖国神社臨時大祭、遙拝式

四月二十六日（金）　夜中「探照灯光芒らしきもの見ゆ」と報ず。警戒を厳にす。

四月二十七日（土）　六潜基軍医長及び磯田中隊長退庁

四月二十九日（月）　天長節、遙拝式

四月三十日（火）　靖国神社遙拝式

五月一日（水）　横須賀鎮守府附となる。

五月二日（木）　司令官に伺候

野球決勝戦

五月三日（金）　夜半より発熱嘔吐。デング病らし。

五月十日（金）　有馬成甫大佐着任。交代す。

五月十三日（月）　敵アッツ島に上陸交戦中。

五月十六日（木）　大鳥島に敵機来襲、一機不時着

五月十七日（金）　送別会食、夜送別能　鉢の木

シテ常世　有馬大佐（金春流）

ツレ妻　島田郵便局長（金剛流）

ワキ僧時頼成田大佐（観世流）

三人三流の素人能乍ら時にとり興味の深いものであった。

五月十八日（土）　退庁。隊総員に挨拶。大艇でポナペに向う。ポナペに一泊。

五月十九日（日）　トラック着第四艦隊司令長官（小林仁中将）に伺候。昼餐に招かる。

五月二十日（月）　トラック発サイパン着。一泊

五月二十一日（火）　サイパン発横浜着

五月二十二日　横須賀鎮守府着

註四、マーシャル神社鎮座祭

御神体は警備隊の工作兵の鋳造した八咫の鏡である。銅と錫の配合など私が示唆した。又その裏面には私の書いた「如在」という二字を篆書で浮出させた。鎮座祭のとき私は神前で次の長歌を朗唱した。

明つ神吾が大君の
知ろしめす大和の国の
鳥が鳴く東の海の
荒潮の潮の八百合に
島はしもさわにあれども
国はしもまねくあれども
クェゼリンの本つ島こそ
三ツ栗の最中の島の
うまし島と人こそ集へ
草も木もしじに生ひたれ
かくしこそあり経むものを
こはいかに渚に立ちて
沖見れば立つ浪高し
空見れば行く雲速し
まがつみの荒ぶる神の
さばえなす荒びさやげば
まつろはぬ神をことむけ
敵浪し打ち鎮めよと
大君の命かしこみ
大船を此の津に泊てて
ますら男の往き守らひ
剱太刀いよいよ磨きつゝ
海行かば水漬く屍
陸行かば草蒸す屍
大君の辺にこそ死なめ
かへりみはせじと誓ひて
暁と明ぬ先より
夜は星の消れ行くまで
武士の弥猛心の
一節に仕えまつれば
遠つ祖、天つ神こそ
かけまくもあやに畏し
尊くも慕はしければ
朝に日に讃え奉らむと
この島に皇太神の
日の御蔭、天の御蔭と
隠ります瑞の御殿
美しく清く造りて
諸人の明き心に
大神を迎え奉るを
天の原照る日の御影
まさやかに見そなはしまして
神風の伊勢の国の
さくくしろ五十鈴の宮ゆ
天雲をいつの千別きて
天翔り天降りいまさね
畏こけれども

反歌

八雲立つ雲の高座とどろかし
天降りませ　日の前の神

大君の御笠かざせる椰子の上の
御空を仰ぎ迎え奉らむ

訂正―環礁11号2頁第5欄註3の5行目宮柱太知り立てひ底つ……のひはむが正しいので改めて下さい。

「ナウル島特集」

ナウル島地誌

事務局編

ナウル島（Nauru Island）は、一名をプレザント島（Plesant Island）と呼ぶ。プレザントとは「愉快な。心地よい。陽気な。おもしろい」という意味であり、心地よい、幸せに満ちた島という別名らしい。赤道の南方僅か四〇キロ弱、南緯〇度32分、東経166度55分、周囲19キロ、面積二一八ヘクタールというから東京でいえば千代田区と中央区を合せた程の小さな島である。

この島はサンゴ礁であるというのと噴火作用によって隆起したものだという説があるが、本会派遣員の見たところでは周囲が鋸状のサンゴ礁であり、そして距岸二百米の間はマーシャル諸島、ギルバート諸島で見るような裾礁リーフが続き、しかもその先は急に深くなっているなど類似点が多いのでサンゴ礁であると思う。何千年か何億年か昔海鳥が生じて以来そのフンがサンゴ礁の上に、推積し、次第にその高さを増していったのではなかろうか。島全体として海抜一〇―二〇米の台地性をなし、西側においては、海抜六十五米の樹木ある丘をなしている。

椰子の実即ちコプラの産もあるが、燐鉱が島の貿易の殆んど全部を占める。島の面積の八割は豊富な燐鉱の発掘地域である。

ナウル島は隣の島オーシャン島でも東南百六十浬あるという中部太平洋上絶海の孤島である。

一八八八年にドイツはこの島を占領し、マーシャル諸島に含めていたが、第一次世界大戦の一九一四年オーストラリヤに占領され、一九二〇年以降国連管理の下に、濠州、ニュージランドが委任統治していた。そして燐鉱はB・P・C（British Phosphate Commission）によって採掘、加工、輸送されていたのである。

島の人口約三千人中ナウル島人約半数、あとは支那人、ヨーロッパ人、太平洋諸島人であった。

昭和十七年九月中旬から昭和二十年八月に至る三年間日本軍の占領下にあった。

戦後英、濠、ニュージランドの共同信託統治下にあったが、本会派遣員が弔問に訪れた翌年の昭和四十三年一月三十一日独立して領土も人口も世界一小さな然し個人所得は世界一という豊かな共和国になって今日に至っている。

ナウル島戦史

事務局編

前数年このかたマーシャル諸諸島に対する用兵的価値が重視せられるようになり、対米邀撃作戦上マーシャル諸島は、日本の前哨基地群として、その防備を強化し、確保するのが、有利であるという意見が有力となった。

随ってギルバート諸島方面の戦略的地位も重視せられ、兵要資料の蒐集も、本格的に実施されたので、開戦時までに、同諸島方面の事情は概ね判明していた。

二、開戦当時のマーシャル、ギルバート諸島

1 マーシャル諸島方面の我が兵力

第六根拠地隊　クェゼリン本島に司令部を置き、ヤルート、タロア（マロエラップ）、ポナペ、イミエジ（ヤルート）、ウォッゼ、エビゼ（クェゼリン）、に砲艇隊、掃海隊、駆潜隊、防備隊、警備隊、航空隊、望楼を。

第二十四航空戦隊　ルオット島（クェゼリン環礁）に司令部を置き、飛行機はウォッゼ、タロア、イミエジ島に分置した。

2 ギルバート諸島方面の状況で開戦前迄に我方が知り得たのは

ギルバート諸島方面

(イ)マキン、タラワには無線電信所があり、白人若干が居住しているが、兵力駐屯はない。

(ロ)タラワ、アパママは陸上改撃機用の飛行場を建設し得る。地勢土質等はマーシャルのそれとほぼ同様であり、工事の施行は極めて容易である。

(ハ)水上機基地の適切な地点は、多数選定出来るが、中にもマキン、アパママは最適

ナウルオーシャン方面

(イ)兵力の駐屯なく、又軍事施設の見るべきものがない。

(ロ)ナウルは陸上攻撃機用飛行場の建設が可能であり且つ地形上防備施設の構築は容易。

三、開戦初期のギルバート諸島方面の作戦

山本聯合艦隊司令長官は南洋部隊（第四艦隊）指揮官にグム島、ウェーキ島を攻略すると共に、ギルバート諸島を掃蕩し、且つホーランド島における敵航空兵力を撃破し、その活動を封殺すべき任務を与えた。

この結果十二月九日横浜海軍航空隊に属する大型飛行艇三機はナウル、オーシヤ両島を攻撃し、同島に異状のないことを確認し全機ルオット島に帰投した。

ギルバート諸島方面掃蕩後は、マキンを除き、他の諸島には兵力を常駐せしめず、横浜航空隊の数機が、この方面の哨戒に従事した。

この様な状態が昭和十七年八月十七日米海兵隊の小兵力がマキンに奇襲上陸を行うまで継続した。

四、米海兵隊のマキン奇襲上陸

昭和十七年七月初旬以降ギルバート、マーシャル方面に敵潜水艦の出没が頻繁となった。そして八月十七日米海兵隊約一六〇名がマ

ナウル島特集

ナウル島の海上から望む山頂を267度10浬

キンに上陸、衆寡全く敵せず七〇名の守備兵中半数をこえる四十六名が戦死するという損害をうけた。敵は当日マキンをそのまま放棄し退却した。我方はこれでギルバート方面防備の欠陥が判り、之を著しく強化することとなった。

五、ナウル、オーシャン島の占領

ナウル島、オーシャン島の攻略は昭和十七年五月南洋部隊指揮官指揮の下にMO作戦（ツラギ、ポートモレスビー、ナウル、オーシャン攻略作戦）の一環として実施される予定であったが、敵機動部隊の出現によって、攻撃を中止された。ところが、前記米海兵隊のマキン島来襲の結果、両島の処理が再び問題化し、八月二十日聯合艦隊は第三、第四艦隊長官に対し、航空機及び駆逐艦をもって速かにナウル、オーシャン両島を攻撃し、所在の航空及び通信施設を破壊し、敵が両島を利用するのを阻止するよう命令された。

次いで八月二十四日、第四艦隊に対し二十九日以後速かにアパママ、ナウル、オーシャン各島を占領するよう命令された。

以上の命令に基いて南洋部隊指揮官は八月二十二日二十四航空戦隊を以て、ナウル、オーシャン両島の爆撃を実施すると共に、第二十七駆逐隊の有明、夕暮の二艦をもって、同日夜間両島の砲撃を実施し、その軍事施設に相当大なる損害を与えた。

ついで八月二十五日午後有明はナウル島に対し、翌二十六日午後三時夕暮はオーシャンに対し、夫々陸戦隊を揚げ何れも無抵抗裡に（両島共敵兵力なし）之を占領掃蕩完了した。

これで十七年五月攻略を計画しながら各種の要因で延びていた懸案が解決した。

それ以後のナウル島の戦闘についてはクェゼリン、マキンを経て進出した横須賀部隊の菅野、江村、大竹三氏のメモを綴ったナウル島日誌を、四高会の江村さんから拝借したので、これによって戦史の概貌を知ることとしたい。

ナウル島陣中日誌

ナウル島四高会編

昭和十七年

九月十六日　香取丸に兵器諸物件を積込み隊員全員の乗船を了し、午前四時マキン島を出港す。

九月十七日　黄海々戦記念日、赤道を北より南に航過する。

九月十八日　午前四時三十分ナウル島に到着即時荷揚、進駐の準備。大艇を卸し、上陸を開始す。

中山部隊と協力、旧政庁跡に午後六時三十分揚陸完了。警備の任に服す。八糎高角砲二門並びに十三粍機銃砲台を築城及び防禦陣地構築、見張所の設置も概ね完了し対敵警戒を厳にすると共に極力配置教育を実施、技倆向上に努む。

十八日の荷揚作業中に運貨船転覆し、岡田三等兵曹行方不明となり之が極力捜索するも遂に発見出来ず。二十四日告別式挙行。

十月七日　静海丸入港糧食補給す

十月十三日　小島軍医中尉病死し十四日告別式挙行後荼毘に附し遺骨を安置する。

十月十七日　米久保海軍一等水兵病死し、十九日告別式を挙行す。

十月二十三日　第三雲海丸入港、生糧品補給す。

十月二十四日　南拓丸入港、貯糧品補給。若槻軍医中尉及び運転員二名入隊す。機銃車、トラック補給、十月中は敵状緊迫せるに鑑み、特に見張警戒を厳密にすると共に見張所、通信施設、陣地の強化に全力を注ぎ、毎黎明時は第一配備を利用し陸戦及び砲台員の配置、教育訓練に努む。

十一月十五日　第一南陽丸入港。食糧補給す。

十一月二十三日　高栄丸入港。飛行機基地の設営隊員来島につき、基地用物件の陸揚を援助し、設営作業に協力す。

十一月三十日　南拓丸入港し、貯糧品補給す。

十二月三日　興西丸入港。生糧品補給す。

十二月五日　第二南海丸入港、飛行機基地資材荷揚作業を援助す

十二月十三日　大宝山丸入港。当隊用発電機及び探照灯其の他兵器類三〇七、荷揚作業中敵潜水艦より魚雷二本射出し来り内一本は幸い途中にて爆発せり。そのため他の魚雷の航路を発見す。直に作業を中止し後進全速にて之を避けたり。敵魚雷は大宝山丸の船首約五米前方を通り、波打岸に衝撃爆発ぜり。同時に敵潜望鏡に対し砲撃す。あと速かに荷揚げに努め無事終了す。

十二月十五日　駆逐艦夕凪護衛の下に平洋丸入港。兵舎及び基地資材陸揚後直に出港す。

十二月十八日　高栄丸入港。生糧品補給す。飛行機基地資材も。

十二月二十一日　長光丸入港。生糧品補給。

十二月二十四日　南拓丸入港。糧食補給す。

十二月中は、開戦一周年を迎え敵潜水艦の活動も侵出活潑化に鑑み機雷艇を増置し極力活動せしむ

昭和十八年

一月一日　大華山丸と第五日ノ出丸入港。糧食、需品及び酒保物品を補給す。

一月八日　海光丸入港。生糧品補給す。

一月九日　カロリン丸入港。貯糧品補給す。

一月十三日　香取丸入港。設営隊の荷役作業を終て出港す。

一月十六日　興亜丸入港。生糧品補給。兵一名入隊す。

一月十八日　南拓丸にて下士官三名、兵三名退隊便乗せしむ。

一月二十五日　富士川丸入港。基地員来島、飛行機燃料及び基地物品荷揚を援助す。

一月二十九日　敵B17一機来襲之を撃退す。我が方の損害なし。七五五航空隊進出に伴い警戒を厳にし作業援助に努む。中攻機十二機着。山下航空隊司令着任す。

富士川丸及び高栄丸入泊中は大発艇を武装し潜水警戒に任じた。

一月三十日　零戦六機来島す。

二月一日　敵機B24型十三機来襲するも之を撃退す。

二月五日　敵機来襲し、対空戦の後撃退せり。南拓丸入港。

二月七日　敵B17来襲し、対空戦我方損害なし。

二月九日　敵機一機来襲するも撃退す。飛行場の新設も第一、二共に完成増強す。

二月十五日　本島に第六十七警備隊を新設のことに発令せらる。特別陸戦隊は解散し、隊員は警備隊に編入せらる。

二月二十七日　水兵長清水四平陣地構築のため椰子材運搬中戦傷死、二十八日告別式を行なう。

三月三日　安土丸入港生糧品、酒保物品を補給する。

三月四日　南拓丸入港。糧食補給。俸給受領す。

三月五日　杵崎丸入港。生糧品（生魚、肉類）補給す。

三月六日　興津丸入港。

三月七日　生田丸入港、海軍大佐竹内司令及び尉官並びに警備隊員来島し、諸物件の陸揚に協力す。

三月二十五日　午後八時より二十六日午前四時まで、引続き、敵機来襲し、四回に亘り対空戦闘射撃を行う。敵に相当の損害を与える。

三月二十七日　敵B17五機来襲

三月二十九日　高栄丸にて第三特別根拠地隊より二ヶ中隊来島増強される。

四月九日　二番高角砲台位置変更のため、八糎砲二門分解砲架堀起運搬準備を行う。

四月十日　運搬移動据付作業完了結果良好なり

四月十一日　六京丸及び神洲丸護衛にて會昌丸入港。荷揚作業を行う。

四月十二日　南拓丸に遺骨三柱托送し横鎮に送る。

四月十六日　生田丸入港。兵器需品等陸揚す。病院船宝丸入港。吉田二等兵曹入院せしむ。

四月十七日　東京丸入港。六七警備隊員多数（山口中尉以下約四百名）来島。兵器及び諸物品陸揚す

四月二十一日　午前七時四十七分敵飛行機来襲。十二機。五十分頃爆弾十数個投下。飛行場滑走路大破損、八時砲台陣地の東方一〇〇米にも数個の爆弾が落下、之がため一時戦闘を中止せり。

砲撃中一機に命中弾を見る。次々に三機編隊の三隊に数弾の有効弾を浴せ、之がため敵機は高度を下げ爆弾を海中に捨てたるもの三機を見たり、翼を傾け海面に不時着したらしい。戦果大いに挙ぐ。

同日午前八時十四分敵機B24十二機来襲。至近弾四ヶ受く。精鉱所に爆弾落ち、重油漕火災となる。

四月二十七日　オーシャン島附近に敵潜水艦発見の報あり。

四月二十八日　タラワ島に敵機来襲の報あり。

五月一日　日吉丸と安土丸入港。糧食及び他物件陸揚す。

五月二十三日　各砲台の弾火薬庫新設も完了し、弾火薬、火工兵器等積込築城作業終了す。射撃幹部員、伝令、砲員、弾火薬庫員、探照灯員の各部教練に努め陸戦教練も実施す。

六月八日　駆逐艦江風と海風入港。糧食をゴム袋に入れ海中に投じ、之を大発艇にて収得、陸揚して補給せらるる有様となった。

六月十一日　生田丸入港。糧食、兵器、需品等陸揚補給す。副田大佐以下当隊への転入者上陸。

六月十八日　午後七時五十分敵機三機来襲対空戦闘。

六月二十日　午前二時二十分敵機八機来襲、対空戦斗。

六月二十五日　五十鈴、那珂入港。転入者入隊。

七月十三日　司令交代、竹内大佐は生田丸にて帰国。

七月十九日　五十鈴入港。増援隊九四名入隊。二五ミリ聯装機銃など揚陸。

七月二十五日　北川陸軍大尉による対戦車攻撃法講習会。

九月八日　井口水兵長アメーバ性赤痢のため戦病死。

（この頃からアメーバ赤痢拡がる）

九月十日　イタリー降状

九月十一日　北昭丸入港直前魚雷を受け、弾薬、糧食、衣料満載のまま、爆沈。生存者四〇名。

九月十八日　午後十時より翌朝まで延二百数十機の空襲を受ける。タラワ島は連続空襲を受けつつあり。

十月二十五日　生田丸にて高等科練習生採用者内地へ帰還

十一月十九日　未明より敵艦載機の波状大空襲あり。

十一月二十日　敵タラワに上陸開始。本島の航空機も出動したが、殆んど帰島せず。

十一月二十五日　柴崎少将以下最後の突撃。タラワの教訓を生かし上陸部隊邀撃用陣地の構築と糧食弾薬の分散格納をはじめる。

（十二月七日までに完了の指示）

十一月二十八日　酒保物品販売停止、本日より減食。（保有量主食六ヶ月分、副食二ヶ月分）

十一月三〇日　タラワ島救援の本島航空隊員全員散華の報を受く

十二月三日　最後の戦給品配給

十二月八日　「敵空母近接の算大なり」の報あり。

十二月九日　未明より艦載機の大空襲、続いて戦艦6隻、巡洋艦4隻、駆逐艦4隻による砲撃一時間続いて空襲あり、沼倉兵曹戦死

十二月十二日　緊急築城作業開始

昭和十九年

一月四日　駆逐艦涼風入港。増援隊、物資到着。

一月十二日　本島の生残り零戦五機のうち三機は本日飛来の中攻と共に島を去る。

この頃殆んど毎日敵機来襲。

一月二十六日　駆逐艦涼風の遭難を聞く。

一月三十一日　今朝敵クェゼリン島に上陸開始。二月上旬マーシャル方面の戦況不利。

二月二十日　トラック島に敵機動部隊来襲。

三月五日　糧食欠乏のため更に減食、一人一食一二〇グラムとなり雑炊とする。

三月―四月　敵機は毎日偵察に来るも爆撃は少くなる。しかし敵側艦隊クェゼリン島附近に集結中敵上陸に備える。対空機銃弾異常のため射撃中弾蒼が火を吹く事故再三あり。空腹に耐えつつ働く。

四月二日　戦斗糧食盗難事件。

四月十四日　相沢上等水兵のため僚友が輸血。

四月十八日　椰子の木割当実施

四月十九日　若菜水兵長が吹子（フイゴ）を完成。農耕用具を作り始める。

四月二十四日　魚撈班編成

四月二十九日　天長節の御馳走あり

五月中旬　従来の農場（南瓜、薩摩芋）を整備更に、緊急農園拡張作業に入る。食糧自給班編成。敵空襲再び盛んとなる。

五月二十七日　海軍記念日、銃剣術試合。

五月二十九日　久しぶりに友軍偵察機（彩雲）二機来島。

五月三十日　同じく艦爆一機来島、各自はがき一通友軍機に託す

六月四日　彩雲再び来島、タバコ（ほまれ）を配給。

この頃連日B25数機乃至十数機の来襲あり、伝単を撒くものあり。彩雲八日にも来島、マジュロ島附近の敵艦隊を監視。戦機にわかに動く模様、本島日本軍は空腹を忍んで戦斗と農耕に従事。

六月十五日　サイパン島テニアン島大宮島に敵上陸開始、聯合艦隊反撃、豊田聯合艦隊司令長官の訓令発せらる。

六月三十日　敵機B25十一機来襲一機を直撃弾で撃墜した。寺島、斉藤両兵曹戦死。

七月七日　敵B24、25計三十九機来襲。

七月十九日　サイパン島玉砕の悲報届く。

七月下旬　連日敵空襲あり。松田兵曹秤を完成する。

八月一日　敵B25三十五機来襲農場の被害大。本日より更に減食一日米二八〇グラム、南瓜一七〇グラムとなる。この頃夜間空襲多くなり、一日再三来ることあり。砲隊で煙草栽培開始。

九月十四日　未明に味方潜水艦イ三十六号（補給用）潜水艦入港糧食、弾薬、タバコ等補給。手紙一通宛託送。

九月二十一日　敵B25十一機来襲、小型爆弾を投下する。若菜水兵長直撃で戦死。

この頃アメーバ性赤痢による戦病死多し。内地も度々空襲を受けている模様。

十月　空襲は数日置きのB25編隊爆撃となるが殆んど毎日大型偵察機の偵察あり。

各隊南瓜の人工授粉数を競争する久しぶりの雨あり。

十月十一日　敵B25十二機の爆撃を受け、探照灯破損。

十月十三日　台湾沖海戦の報聞く

十月十七日　甘薯と小豆の菓子を作り会食。ギルバート島民六名による歌と踊り（椰子汁より作った蜜や酒も重要なものとなる）

十月二十五日　比島沖海戦、武蔵沈没の報を聞く。

十一月五日　ヴォートシコルスキーXF4U戦斗機十九機来襲

十一月十九日　XF4U戦斗機十八機、B25一機来襲。

この頃より来襲機はヴォートシコルスキーが主体となり、急降下爆撃ならびに銃撃を加える。（タラワ島敵空軍の爆撃訓練の感あり）

この頃米食は週一回程度となり殆んど南瓜、イモに頼る。

昭和二十年

一月十日　XF4U十九機来襲直撃をうけ機銃員戦死。

この頃戦病死相つぐ。

三月　京浜、阪神方面は大空襲を受けつつあり。硫黄島玉砕。敵はさらに沖縄方面に進攻開始。戦局最終段階に入るの感あり。

四月一日　従来本島を「南流島」

と書いたが本日より「南瓜島」と改める。

四月三日　この頃士気昂揚と慰安のため演芸会多し。敵機の空襲は稀となる。まぐろの大漁あり、南瓜といもはほぼ十分な収獲を得るようになる。椰子の木を兵員、島民、支那人共に一人三本づつ、平等に分配する。

五月上旬　ベルリン陥落。ドイツ降伏

八月十六日　無条件降伏を全員に伝達される。一同虚脱状態に陥る。

八月十六日、十九日自決者あり。

八月二十日司令より、「祖国日本を再建する責任がある早まった行動を厳に戒むべし」との趣旨の訓示あり。

九月十三日　濠州船二隻、駆逐艦一隻入港。濠州軍上陸。

九月十四日　濠州軍により全島日本軍は武装解除を受ける。

九月十六日　濠州船に乗船。ブーゲンビル島に向う。

九月十八日　航海中濠州兵の小銃暴発。日本兵二名重傷を受ける。船内一触即発の空気となる（桜田大尉強硬に抗議）

九月十九日　ブーゲンビル島トロキナ入港。

九月二十日　下船。上陸場から約三里の山奥に悪路を「死の行軍」濠軍は「パターンの報復」という。日没頃収容所に到着した。周囲には鉄条網をめぐらし、夜間は照明灯を点し警戒厳重なり。

（この間）他地区から集結させられた陸・海軍と共に約十のコンパウンド（収容所）に収容され、下士官、兵は濠州軍や米軍の作業に使役される。

戦犯容疑者隔離される。

十月下旬日本部隊はブーゲンビル本島周団のファウル諸島に分散されることとなる。

十月二十六日　移動行軍。旧ナウル部隊の大部分は大発に分乗ササマサ島およびピーズ島に向う。

十月二十七日　ササマサ島、ピーズ島着、直ちに湿地帯のジャングルを切拓き宿舎を建設。

十一月十八日　士官の大半はタウノ島に移動。

十二月十五日　ナウル島より島民及び在住支那人飛行機にて来島、ナウル島従軍者の首実験行なわる。戦犯容疑者指摘さる。

この頃悪性マラリヤ猖獗を極め、マラリヤ未経験者の旧ナウル部隊は体力の低下と相俟って連日多数の死亡者を出す。その中で濠州軍の使役にも駆り出される。

昭和二十一年

一―二月　ついに待望の復員船到着、ナウル部隊は当初の人員の約六割に減少し、戦友の遺骨とともに三便にわかれて故国へ帰る。

（附記）菅野海軍少佐手記より

二月六日　待ちに待ちたる帰還船有馬山丸来島す。

二月七日　早朝より帰国準備を整え、マラリヤ病と栄養失調のため体も衰弱しており、漸く身廻り品を背負い、船員及び看護婦に手を取られながら、有馬山丸に乗船す。その喜び何にも仮令ようがなかった。

二月八日　タウノ島沖を出港。

二月九日　ブーゲンビル島トロキナ沖に仮泊、午後四時三十分母国に向け出港帰途につく。

有馬山丸より慰問品ホマレ一個、塵紙一帖、歯磨粉とブラシ、栄養菓子ビスケット、密柑などを戴き食事は粥に梅干と玉子、久方振り美味しく食す。十二日よりは並食となり、麦飯に味噌汁煮魚等それにボタ餅二ツ配給され、十五日には日本酒二勺と羊かん二片を戴き十六日に赤皮編上靴、純毛メリヤス上下を配給される。十日午後三時三十分赤道を通過し、十七日午後後八時頃伊豆の大島を遠望し、その嬉しさは格別であった。

十八日午前八時浦賀港に無事入港す。

註、同氏は同日午後四時久里浜国立病院に入院、三月十三日敷設艇で下田の湊国立病院に転院、同二十九日退院、横須賀の自宅に無事帰宅した。

ナウル島の慰霊

佐竹　エス

昭和四十二年七月二十六日午後三時、オーシャン島を出港、明朝ナウル島入港の予定です。船員始め船客も大喜びで、マーシャルからのお土産（椰子の葉や貝で作った民芸品）を見せ合ったり、お化粧やら着替と大はしゃぎです。このラリックラタック号は、七月十九日午後六時マジュロ港を出港、ナウル島へマーシャルの人達のお米の緊急輸入のための船便でした。船客も皆ナウル島へ行く人達です。その船は私達遺族会の慰霊訪問のため、特にタラワ、マキン、オーシャンに寄港して下さったので、船内の日用品も食料も底をついてしまいました。他の船客は、各自食料を持参していましたが、普通マジュロからナウルまでは二、三日の航程ですから、充分用意したつもりでも寄港地がふえたので、何時ナウルにつけるか心配顔でした。交通不自由な海洋民族マーシャルの人達は、予定等という事も考えず、あなたまかせというように全然気にもしないようでしたが、明日はナウルですねと嬉しそうでした。

タラワ、マキン、オーシャンは特別に寄港していただいたので、短時間で最大の目的を果すため努力し無理もありましたが、ナウル島では少くとも三日は停泊するとの事なので、戦跡訪問も慰霊祭も充分行えること、又この慰霊訪問中外交上最大の難所と案じたナウルも無事済みそうに思われました。英霊もきっと私達を待っている事でしょう。頭上の南十字星が頻笑みかけているかのようでした。二十七日朝七時、ナウル島の検疫所前に錨が降されました。海際から離段のようにブロック二階建のアパート群が続いて見えます。オーシャン島の二三倍はあるでしょう。丘の上まで家が見えましたし、自動車が随分並んでいるのも見えました。早く上陸したいと準備も済してあるのに検疫官が仲々見えません。港には大きな濠州の貨物船が着いていましたが、この船の検疫のためおくれたのだと後でわかりました。九時になって検疫も済み、交渉の結果来島の目的に協力するよう取り計うから本日午後一時から二時の間に政庁に来るように云われました。ヤルート島での協力者リー氏の紹介のジョルダン氏も船に見えられたと知らされました。ジョルダン氏はマーシャル出身の人なので、マーシャル船の入港を聞き来船されたそうです。戦争中日本軍に協力し、日本語も何とか通じます。早速私達の慰霊訪問に協力し、案内その他何でも出来るだけのことをさせて下さいと云われました。何時も乍ら、考えられない程、好都合に運ばれそうです。ボートで上陸し、汗びっしょりで荷物をまとめていると、私達の仕事を見ていたのか、赤いシャツの壮年が冷いコーラの缶を手まねと英語で飲みなさいとのことです。一寸戸惑いましたが、のどもからからでしたので浮田さんと共にニッコリして頂きました。この方はジョルダン夫人の弟さんリチャードさん。今ジョルダン氏が船に行っているので、姉と二人で、その帰りを待っている所だったそうです。ジョルダン氏はラリックラタックでマーシャルの人達と話がはずんでいるのでしょう。それでこの方達の御好意で、荷物を自動車に積み、ジョルダン氏宅に案内して下さいました。そして政庁え行く用意をしていると、ジョルダン氏が帰って来られ、今日はキング長官が所用のため、明朝九時に変更して下さいとのことと私達の宿泊はこの部屋を使って下さい、政庁からの連絡もここにしておきましたと申さ

れました。私達は出来るだけ御迷惑をかけないため帰船するつもりでしたが、たって仰言るので、御好意に甘えることとし、船に積んである食料、寝具等の日用品を取りに行ったりしました。五時頃リチャード氏が見えられ、御自分の車で戦跡訪問に出かけました。

ナウル戦友会から頂いた地図を持参し、日本名で山中湖と書いたヴァダ湖や海岸の道路等を一周して飛行場に近いジョルダン氏の宅にもどりました。戦争のあったことを偲ぶものは見当りません。名も知れないきれいな南洋の花が咲き乱れ、果物の王様といわれるマンゴやパパイヤの豊かな島でした夕食を御馳走になったあと、綺麗なシャワー室でマジュロを出て半月ぶりの垢を落し、板の間の部屋で寝むことが出来ました。又三十一日まで停泊するとの船長からの知らせによりゆっくりしたナウル島での一夜を迎えました。

二十八日は九時の約束なので八時すぎ、ジョルダン氏宅から歩き、約二十分で政庁に着きました。政庁は日本軍の作った飛行場の中央海岸寄りの所でした。受付で用件を話すとすぐ案内されたのは、警察部でしたが、身元確認のようでした。カメラや8ミリを示し撮影許可を受けましたら、ハリス警察部長は、それと同じキャノンの8ミリを見せて下さり、いや日本製のは最高品ですと話もなごやかに許可して下さいました。

政庁の前庭には、太平洋戦争中ナウル島を守るため最後迄居残って行方不明になった政府役人、牧師、医師、薬剤師四名の慰霊碑が

あります。警察部長に案内をお願いし、同じく殉国の勇士の御冥福を祈りました。やがて長官に会見のため、長官室に案内されましたが早速浮田さんに握手をもとめられ、戦後日本に進駐し目黒のオーストラリヤキャンプに二年間駐留していたとのことです。来島の目的に全面的に協力すること、又現在の東京・日本の発展を嬉しく思われていること等話されました。本会から持参の真珠のネクタイピンを私がつけて差し上げました。

慰霊碑の建立場所はヴァダ湖近くではと云う話が出ましたが地主の了解を要する。丁度今地主や有力者がナウル島独立についての議会が開かれている。それにはかるから二十九日（土）昼まで待って下さいということ及びナウル戦友会から頂いた日本軍時代の地図（日本名で作られたもの）を英訳して是非頂戴したいという申し入れがあり正午頃帰りました。

午後はまたリチャード氏の案内で山間部即ち金剛山（司令部のあった所）や鉄道の跡、病院跡、ヴァダ湖畔の戦跡訪問をしましたが司令部そのものの跡は燐鉱石の採堀場となりそれらしいものは何もありません。病院跡近くに発電機の大きな残骸や鉄の大車輪が見られました。湖の周辺は熱帯の湿地帯とあって草は高く伸び、紫色の花が一面に咲いていました。近くに高い見張所跡の建物が一ツ見えましたが他は所々に住宅が建ち、何れの家も二、三台の自家用車をもっています。今では個人所得は世界第一位という裕福な島なので、戦争の跡を偲ぶようなものは見あたりません。

二十九日、午前中に慰霊碑建立の場所をしらせる事になっていますので浮田さんは地図の地名や英訳に汗だくです。私は出来るだけナウルの人達ともお会いしたり、風物も見学しようと一人でカメラをさげ出掛けました。海岸ではレジャーか仕事かわからないがモーターボートで鰹を釣り十数尾砂浜にあげてありました。ボートは引上げると自家用車で自宅まで運びます。大抵の家庭に自動車とモーターボートを持っているようでした。鰹の刺身を作り日本式に粉ワサビをとき醤油で頂きましたが、ナウルでも日本式に刺身を食べる人が多く醤油は珍重だと、輸入してもすぐ売切れるとのことでした。キッコウマン醤油、味の素はナウルの人達はよく知っていました。私には言葉はわかりませんが、ゼスチャーで大体通じますし、ナウルには中国人が多く、漢字の標識が多いので自由に歩く事が出来ます。島民は皆親切で、人なつこく、家には花壇があり芝生もある。緑、白、赤色に塗られたのは中国人、ブロック建のアパート群は燐鉱石会社の社宅でした。

政府からの連絡がおくれ案じていたら二時過に昨日の警察官が来られ、議会での話では、日本軍はヴァダ湖附近だけで戦死したとは思えない。島全体所々で戦死なさった事でしょう。それに今後の管理上も不便だから、政庁前の外人墓地が適当であるとのことで、その第一号地に決めたとのことでした。それで三十一日（月）八時―九時慰霊祭を行う案内を出す事や、ナウル島の独立運動の話さては戦争中の日本軍の思い出等などやかに過ごしました。又明三十日（日）は午前十一時に教会の牧師さんがお会いしたいので予定しておいて下さい等話され四時過帰られました。

五時新聞記者のインタービュー申入れがあり写真や録音で来島の目的等についておさめられ新聞、ラジオに使われたそうです。

三十日は朝方から物凄い雨でした。明るくなるのを待てず起きぬけにこの雨（天然シャワー）で髪を洗いました。ナウルは雨が少なく水はオーストラリヤから船で購入しています。ジョルダン氏宅には大きな水槽が三ツもあり遠慮なく使うよう云われはしましたが出来るだけ遠慮しそれまで洗髪はしませんでした。マーシャルに行ってからはスコールでの洗髪が当然のようになっていました。

金剛山を望む

慰霊祭を前にスコールに恵まれ髪もきれいに洗え、墓地も洗われたことでしょう。ナウルでは今日の雨は六ケ月振りとの事で貴方達が、この雨を連れて来たのだと信じ大変喜ばれました。雨の中を昨日約束の教会会伺いました。教会の前庭にも、この戦争の慰霊碑がありましたのでこれに額づき御冥福と永遠の平和を祈りました。その後牧師さんのお宅へ案内され、戦争中のお話や慰霊碑建立について永遠の平和を神にお祈りする等話され又慰霊祭には参列いたしますとか教会の新聞に発表しますなど好意を寄せられました。午後雨も止み、一段と鮮かに草木もよみがえったように思われた中を、日本軍時代の司令の住宅、水交社に使われていたという高級住宅等を廻りました。

現在迎賓館ナウルハウス前には大砲の砲身だけが赤さびで淋しく横倒しになっていました。庭の花壇にナデシコや百日草が南洋の花と一緒に咲いています。戦の合間に育てたのであろうと思われる日本の花が今も美しく、ひっそりと話しかけて来るかのように。

明日の慰霊祭を心おきなく出来るようにと船に荷物を取りに行ったり、祭壇作りの準備もしました。

三十一日、慰霊祭用品全部リヤカーに積み、ジョルダン氏と三人で静かに曳いて行きました。約束の八時前に墓地入口に着き、政府の役人を待ちましたが、間もなく新聞記者が車で見え、次いで牧師さんもカトリック、新教両方から来られ濠州人、ナウル島民など多数集りましたが、政府の方が見えないので新聞記者が迎えに行って下さいましたら、ナウルにも自動車交通事故があり警察部は大部がその現場検証に行ったとのこと、やっと十時半外人墓地の地図と大きな鍵をもって来られました。早速外人墓地第一号地に持参の木製慰霊碑を建て、各島と同じ形で慰霊祭を行いました。浮田さんの祭文奉読後持参の線香を立て合掌し御冥福をお祈りします。参会して下さった政府役人、牧師、濠州人、島民の方々全員が私達と同じように跪まづき両手を合せて拝んで下さいました。最後にハリス警察部長がきっとこの墓はお守りしますと新しい墓標の前で浮田さんと堅い握手をかわされました。およそ一時間、滞りなく慰霊祭を了えました。日本からのお土産もお分けしました。参列の新聞記者、濠州人その他多くの人々が盛んにカメラのシャッターをきっていました。一同解散のあと祭壇を片づけ、墓標の周囲に月見草の種をまき、早く花が咲いてくれるよう祈り乍ら用品をリヤカーに積み墓地を後にしました。東京出発以来一番大変と思われたタラワ島マキン島オーシャン島ナウル島の慰霊祭も無事完了できました。遺族会本部にも早くお知らせし、皆さんに喜んで頂くよう電報を打つことに

し四・五ドル（邦貨一八〇〇円）を奮発しました。その港の近くを歩いたり、日本軍が作ったという建物等をカメラにおさめました。出港は又明日に延期されました。ナウルでの予定した行事も完了しゆっくりした気持で夕食後庭のパパイアの木の下で涼をもとめていたら近くのムービー（映画館）に誘われ見に行きました。冷房もありましたが映画の筋がよくわかりません。着飾った大勢の観客が口笛を吹いてにぎやかに楽しそうです。島民達は始めて来島の日本人だと伝わって握手をもとめられ歓待されたようですが、映画を見に行ったのか、私達が見られに行ったのか判りませんでした。服装は整えて行ったので、遺族会の代表と尊敬されるよう努めました。

取残された砲身

お世話になったジョルダン氏からナウル島戦友会にナウルの椰子のエキスを托されました。本会々員の方々にも何か南半球からのお土産を考えましたが、大部が輸入品でナウルの特産品は見当りません。輸入品はマジュロより安いので、マーシャルの人達は皆買物のため来たのだそうです。私達は船の食料の貯蔵量も減ったし、船では水ものめないのでサイダーやコーラのようなものを買い込みました。入港前期待したすべての予定を完全に果し八月一日午後六時多勢の官民に送られ、独立を間際に迎え活気のあふれるナウル島に訣をつげてエボン島に向いました。

後　記

昭和四十三年三月からナウル島四高会に出席させて頂いています同会では慰霊祭や靖国神社参拝後懇談会が行われました。その会で8ミリやスライドで、現地の現状や慰霊祭の様子を報告しました。ジョルダン氏から托された椰子のエキスも全部が呑まれ、ナウルの近況をたのしそうに聞いて下さいました。席には多くの御遺族の方も、お見えになっていましたが戦争中の御苦労を察する一助となったように思われました。

私達がナウル島を訪れたときは六ヶ月ぶりの雨との事でした。小さな島なのでたまにスコールが来ても一寸のずれで海にそれてしまうのでしょう。赤道直下故に年中三十度以上の暑さ、平時でも他から補給がなければ、食料も水もなくなる島です。その上マラリヤ、デング熱、アメーバ赤痢と悪質の伝染病も多く、殆んどの兵士が病気に罹られたそうです。薬品も底をついた結果、海水と天水（雨水）を混合してリンゲル注射液（生理的食塩水）としたり、椰子殻の黒焼を下痢止として用いる、椰子汁のエキスを栄養剤として元気を取戻した方も多かったそうです。又終戦後ソロモン群島に移動させられてから、そこで戦病死された方も多かったと聞きました。又戦友会でお会いした方の中に両手共手首から10センチ位の所を切断された戦傷の方がおられましたが、残った骨を指のように使い、義手もつけず自動車を運転し、機械を使い、工場長として活躍しておいでの方もありました。

慰霊旅了えて帰る

私は主人から日本海軍には不可能という文字はないと聞かされていましたが実際に触れた感じが致しました。

両手首のない方が、それを手術された軍医長さんに御礼を申していましたが、前線では切るより外方法がなかったのだ。元気でよかったナとの会話でしたが、出席の殆んどの方がこの軍医長に助けられたと挨拶しておられました。

死線を越え、生き抜かれて生還した方々も、死にもまさる苦痛を忍ばれたことと心からお察しすることが出きました。ややもすれば遺族であるが故良きにつけ、悪しきにつけて、故人を思い出し、生還された方々に羨望や更には妬みさえ感じていた私でしたが、生も死も結局同じ運命だったのでしょう。死んだ者の方が武士道を全うしたとして安らかさを与えられ、当人は幸せに死についたかのようにも思われました。

戦後二十五年、この平和な日本。オリンピックも、万国博覧会も立派に為しとげられつつあり、経済大国として全世界に羨やまれるようになったことも、死線を越してどんなことでもやりぬいて、不可能を認めない精神の方々が、戦争のない、平和を一番身にしみて全力投球の結果のような感じがします。この遺族会の合同慰霊碑も立派に出来ました。殉国の勇士の安住の場所として安らかにお休みください。そして永遠の平和な日本を見守ってくださいと念じつつ。

慰霊祭

日本万国博覧会
平和繁栄驚世界
英霊忠魂玆顕彰
正襟遙拝慰霊祭

昭和庚戌春

元海軍七〇一空司令
木田達彦

急いでお聞き したいこと二ツ

事務局

次の二件何れも準備の都合がありますので、参加希望の方は**七月二十五日**までに、その旨本部におしらせ下さいますようお願いします。＜一＞についての具体的計画は環礁13号でお知らせします。旅行先その他懇親旅行全般につき、よりよくするための御意見お聞かせ下さい。

＜二＞についてはクェゼリンと打合せの上決定次第参加希望の方に御案内状お送りします。

＜一＞　来年二月六日の懇親旅行

今年二月六日の直会懇親旅行は大変な好評をいただきました。来年も是非とか、毎年頼むとかいう御便りを沢山いただきました。そこで佐藤さんや岡野さんは先般来大張切りで計画を練り今のところ三浦半島一週の旅を考えています。史蹟に富む鎌倉、江の島、広漠たる太平洋の水際三崎、城ケ島東郷元帥の軍艦三笠を中心とする横須賀、小原台、観音崎、久里浜一泊の旅。

＜二＞　徳原夫妻にクェゼリンの今日を聞く座談会

万博見物を兼ね徳原夫妻が、八月二十五日羽田着、九月中旬ホノルルに向け羽田発予定で来日されます。この機会に昨年のような考え方（環礁10号12頁）で或る日の夕刻ゆっくりした時間をもちたいと思います。

ウィリアムス氏書簡

Keith S. Williams

環礁、マーシャル諸島の写真、日本万博の案内及び日本交通公社発行の日本各地案内お送り下されありがとうございます。マーシャルの写真は私にとって思い出の多い、とても貴重な価値があり、厚く御礼申し上げます。

私は今でも日本語を読む勉強をつづけており、字引をたよりに、ゆっくり読んでおります。やっと目次を訳しおわったところです。どの目次を見ても私にとって大変興味のある事柄が含まれているように思います。今後環礁が発行される毎に頂戴いたしたいと熱望いたします。なお私をマーシャル方面遺族会の准会員としていただくことは許されないでしょうか。もし許されるならば、発行に要する諸経費の一部を分担させていただけるし「環礁」も頂戴できるということになりとても嬉しく思います。

もう一つお尋ねしたいのですが環礁の編集者及び貴会会員は、私が経験したルオットの戦闘の報告に御興味をお持ちいただけるでしょうか。昭和十九年から昭和二十年（註、クェゼリン、ルオット玉砕後終戦迄）にかけて私の体験したウォッゼ島に対するアメリカの急降下爆撃隊の報告も加えてのことですが。もしお読みいただけますならば、あそこで、私の体験した短篇の話や、私が見た日本軍の防戦の報告などを差上げたいと思います浮田さん！私はアメリカの侵攻艦隊に乗せられ、昭和十九年一月三十一日ルオット島に到着したのです。それから昭和二十年の八月までルオット島にとどまり、その間ウォッゼ島、ミリ島、マロエラップ島、ヤルート島、そしてウェーキ島に対する急降下爆撃に参加しました。遺族会会員中「敵軍の」〈原文 by the "enemy"〉の実戦談を読むことも興味があると思う方もあるのではないでしょうか。

もし時間にお差支えなかったら一九六七年（昭和四十二年）あなたがあの広大な中部太平洋全域を行動されたお話をきかせて下さい。

浮田さん及び奥様の御壮健をお祈りし、いつも良い気候でありますことを祈っております。この二年私はむしろ病気勝でした。今は私共夫婦極めて元気にしております。

私は大阪で催される本年の万国博にはとても興味をもっております。遺族会からお送り下さった万博案内、日本旅行案内は私共心からよろこんでおります。だが今年お伺いできるかどうか一寸わかりません。一つは私の健康上の心配ともう一つは勿論経費のことです。何しろ航空運賃は大変高価ですから。思いがけず万博見物にゆけるようでしたら勿論、お目にかかりに東京への旅もいたします。お手紙お待ちします。

（在米本会篤志会員）

父の遺品27年ぶりに

戦歴を物語る　貯金通帳

（事務局より）

この記事は去る五月二日毎日新聞の社会面に、井出郵政大臣から鈴木麗子さんに遺品を手渡される写真と共に大きな見出しで載せられ記事の全文です。

実は本年三月二十七日郵政省貯金局の坂田氏から事務局に『毎日新聞石川版（三月二十日）と北国新聞（三月二十三日）に元米国海兵隊員が遺品を渡したいため遺族を捜しているという記事がのっていたのでもし遺族の住所がお判りだったら知らせてほしい』というお尋ねがありました。遺品というのは、

○矢島重善殿の自動車運転免許証

○橋本良蔵殿の郵便貯金通帳

○野村信二殿の郵便貯金通帳

の三点でした。

矢島殿の、遺族は後前から本会と連絡がありすぐ判りました。あとのお二人は本会関係の戦死者であり、すぐ判りましたが戦死公報発送以後御遺族の住所変更があり、環礁一号も返戻となったままになっていました。今度このことがありましたので恩給の受給関係、同期生名簿等あらゆる方向から調べやっと判りましたので郵政省にお知らせし、それぞれ御遺族のお手元にお届け出来ました。

×　×　×

太平洋で戦死した海軍士官の〝遺品〟の貯金通帳が一日、東京、霞ケ関の郵政省大臣室で、井出郵政大臣から遺児のピアノ教師、鈴木麗子さん（二七）＝長野市吉田横町＝に手渡され、二十七年ぶりに遺族の手に帰った。

この貯金通帳は昭和十八年十一月二十日、クェゼリン島の基地から索敵に飛立ったまま帰らなかった第七五五海軍航空隊所属、海軍少佐、野村信二さん（当時二十五歳）が残したもの。翌年二月、同島に上陸した米海兵隊の一員、JBジョンソンさん（ロスアンゼルス郊外ホモサビーチ市在住）が、本国に持帰ったが、昨年末、太平洋戦争開戦記念日のニュースを聞いて、通帳を思い出し、遺族に返そう、と郵政省に依頼した。

同省で貯金通帳原簿などをたよりに遺族を捜した結果、鈴木さんがわかった。

戦火をくぐり抜けて残った通帳には旧海軍航空隊の基地郵便局のスタンプが押してあり、南太平洋の各地を転戦、マレー沖戦で感状も受けた野村さんの戦歴を物語るよう。

生後八カ月で父親が戦死、昨年三月には母親とも死別して一人ぼっちの鈴木さんは「たったひとつの父の遺品です。母が生きていればどんなに喜んだことか……」と目をうるませていた。（昭和45・5・2　毎日新聞朝刊から）

×　×　×

教育勅語謹写奉納の会

久重一郎

私は本年一月十八日明治神宮の内苑弘心亭で開かれたあけはる会（教育勅語を謹写して明治神宮に奉納する会）に初めて参加しました。式は午後一時に始まり、皇居遙拝、国歌斉唱、教育勅語奉読、明治天皇の御製朗詠、教育勅語の謹写、懇談午後四時明治神宮に昇殿参拝の上奉納の式典を終りました。

この間私は迚も筆舌に尽すことの出来ない神聖な、そしていかにもすがしがしい気持に満たされると共に、心の中に何とも言えぬ勇気の湧いて来るのを覚えました。

御承知の通り、今日我が国の世相は混迷汚濁、殊に精神面の頽廃は真に憂慮に堪えぬものがあります。之れは大東亜戦争の敗戦に伴う占領政策の強圧により、吾が国の尊い麗しい歴史と伝統は抹殺又は歪曲せられ明治憲法は廃止せられ、教育制度を変革して教育勅語をタブーとした処に起因するものと思います。

このような時世に、今の処人数こそ少数ではありますが教育勅語を謹写して明治神宮に奉納する会の在ることは誠に喜ばしく大いに意を強うする次第であります。また、本年新春明治神宮に初詣での人員が元日だけで百五十万を突破した事実と合わせ考え吾が国思想界の前途に明るさを感じた次第であります。そして私は老軀に鞭打ち微力を捧げておる者であります。私は吾が日本国を日本本来の

麗しい神ながらの道義国家に立ち返らしめるには明治大帝の大御心たる教育勅語の大精神の復活高揚と靖国神社の国家護持、自主憲法の実現以外に他に方策はないと確信する者であります。

あけはる会は明治天皇より賜わりました教育勅語を謹写して明治神宮に奉納することを通じて、日本肇国の大精神である「神ながらの道」を正しく理解し、汚濁せる世相を浄化し、吾が国を平和と繁栄と幸福に満ちた本来の道義国家に立ち帰らしめ、更にその慶福を頒ちて世界全人類の幸福に寄与することを念願し精進しております。本会では明治百年奉祝記念行事の一環として靖国神社参拝の御遺族を通じて全国的に教育勅語写を無料で継続配布しその精神の復活高揚を祈念しております。本会では毎年年頭謹写奉納会、年中行事恒例謹写会（5回）、教育勅語渙発記念日（十月三十日）奉納式典を行っております。

本会の趣旨にご賛同の方は半紙白紙に教育勅語を謹写（毛筆、万年筆、ボールペン、サインペン何れでも結構です）して随時ご郵送下されば取纒めて奉納の手続を執ります。皆様のご謹写をお待ちいたします。

なお、この勅語謹写奉納（郵送）会員は入会金も会費も一切不要であることを申添えます。

東京都大田区田園調布3—36—3　〒145
電話（七二一）二四五五番
あけはる会員久重一郎
（海軍少将八〇才）

◇会員便り

福島　吉津　みどり

初冬の候と相成りました。役員の皆々様には、会のため、そして増々混雑になる社会のためにと、毎日御多忙な日をお過しのことと遠察して心から御苦労様と御礼申し上げます。

さてこの度突然書面を差上げますのは、先日郵便局から通知がありまして、亡夫吉津武が戦地にて預金をして居りましたことが解り驚いた次第です。実は出征の折、月給は家族渡しとしてくれましたので、その当時終戦まで、それは続きましたので、私は今更主人が預金などして居たとは思っても見ませんでした。それがあの当時の金額の事ですから、今の額からいえば、かなりの額のなるわけですきっとマーシャルでの現地手当か何かだったのだろうと思います。

頂いた預金は三二二円でしたが私も少し足しまして何か遺族会のお役に使って頂けましたら故人もさぞかし喜んでくれることと考えまして送金いたします。どうか御受納下さいますようお願い致します。

私は終戦当時は小さかった子供達のために、留守も出来ず、昭和三十年からは自分の健康がすぐれず、病院生活などが多かったために今年こそは今年こそはと思い乍ら、とうとう今年迄靖国神社の参拝も出来ずに居りました。

それが先月御創立百年祭の案内状をいただきましたのを機会に、長年の希いであった昇殿参拝をさせて頂きました。

初めての参拝のためか只々涙が出て困りました。毎年二月六日に行って下さる慰霊祭には、一度だけでも、参加させていただきたいと思いながら、豪雪地帯のために、交通の便が悪く、何としても出席はできませんでした。

そんなわけで今度の参拝は、亡夫のためにも、自分のためにも、心から嬉しいことで御座いました。

終戦以来二十余年、ただ考えているだけの自分を、きっと主人の霊が呼んでくれたものと考えます。私ももう六十才いよいよ老境に入りましたが、又来年も参拝したいものと思って居るのでございます。

貴方様方には尚一層深刻化する日本社会のために大いにお働き下さいますよう御願い申し上げます

◇附　記（事務局より）

何よりも貴い御遺産全額の御寄附襟を正していただきました。戦死された方の遺された貴いお金まで頂戴している遺族会がどこにありましょうか。

前にも載せたことがありますが篤志会員松平永芳様からいただいた環礁4号巻頭の辞「美中の美」役員の方々の御指導もさることながら会員の皆様からのお手紙やおはがきに溢れでる麗はしい御激励によって美しさが保たれ、かつは必ず英霊もお喜び下さっていることと存じます。

石川　小川　如声

拝復　ご丁寧なる御書面をご親切に有難うございました。尚霊砂もお送り下され重ね重ね厚く御礼申し上げます。本当に色々と御世話下され、大変御苦労なされし事を拝察いたし深く感謝致して居ります。実は私も共に生死を誓って戦場に臨んだ友が、戦かわずして、無惨にも尊い生命を絶えて屍をミレーの地に埋られたことを覚えております。私は幸せにも一年と五ケ月は海に潜り魚を取ること一日に四時間、木に登り「ヤシ」の実やパンの実を常食としてやっとのことで餓死をまぬかれ米軍の砲弾にも当らず生きのびて来たのですが、戦死者の遺族の方に今でも聞かれるのですが、私は遺骨はめいめいに年月日を記入して保管しておりましたが終戦後上陸するときに、米軍によって、少量しか持ち帰りができなくなり、本当に遺族の方々に申訳けがなく、又どんな事を聞かれても本当のことは申されなく只戦況の複雑さを語るばかりです。私にはまだ此の世に、なさなくてはならぬ役目や仕事が残っているものと思います。復員後四人の子供が生れ家族七人で、どうにか細々と生活をして居ります私は幸せにも中支戦線や満州警備と六年十月の軍隊生活にて少しばかりの恩給をもらって居りますが今思うに戦死された同士の遺族の姿をながめる毎に、国からもっと補助してあげてほしいと思います。私も戦死された戦友の分まで働かなくてはと思い体の続く限り働いております。今度七月中頃に遺族の方をお招ねきし、二十七回忌の法要を営みますから、そのときに貴会の御意志もお伝えいたし、いつまでも遺族会を続けてゆくよう御支援申し上げます。尚金沢よりポナペ島へ慰霊に渡航することになっております。一行十二人で費用は各自負担だそうです。私も一度はミレー島え行き、戦死者の遺骨もたしかめ慰霊に行きたいと思って居ります。政府のお力をお借りしたいものと思っております。

浮田附記　ポナペ島は島民数も多いし、マーシャル諸島行の船は寄港しますし、信託統治領の支庁もありすので、予定をたてて行くことが出来ます。しかしミレー島行は、政庁のあるマジュロ島までは飛行機でゆけても、マジュロ島からミレー島への交通がなかなかありませんので、相当期間マジュロに滞在しないと行けないのではないかと思います。御希望の時機がきまりましたら施行計画のお手伝いいたします。

岩手　菅原　ヨリ
〃　高橋　タキ

この度は思いがけないお手紙に接しまして、夢ではないかとばかり驚き又狼狽えた程でございました。一日として忘れることの出来ない夫の消息を知り得たよろこびで一ぱいでございました。あたかも現在に生きている夫からの便りでもあるかのような錯覚さえおぼえました。五年前もお手紙下さいましたそうですが、横須賀から疎開して来ましてから三度も住所が変っておりますので大変ご迷惑をおかけ致しまして、申訳けなく思っております。

同じ戦地で戦死された方が北上に居ることはわかっておりましても、お逢いする機会もなかったのでございましたが、未亡人の会黄

菊蘭会が結成されましてからは、ちょいちょいお逢いしましては、語り合い励ましあっております。

この度も早速お逢いいたし、手をとり涙しながら環礁の一字一字を読み合いました。この二月の慰霊祭には出席致しかねますが、次の会には是非参加させていただきたいと思っております。これ迄に会をおつくりになりました御苦労の程深く感謝申し上げます。

奈良　安居　美子

この度は思いがけもなく、亡夫武一郎の戦歿場所をはっきりと御確認下さり、お知らせ誠にありがとうございました。マーシャル群島方面とのみ知らされており、地図を出して見ては、どの島であろうかとみつめてだけおりましたがお手紙ではっきりとわかり安堵いたしました。早く御礼状を出さねばならないのですが、私昨年十一月中旬から入院いたし、腸の大手術を致しまして、ようやく退院出来て只今家で養生している次第です。

広島　浜本米一

毎度ながら御親切に有難うございます。環礁十一号を頂きました私が病気をしておりますので、遅れまして相済みません。不悪。

会費を少し人に頼んで送りました。お受取願います。老人の上、病床に居りますので、何彼と御無沙汰しておりますが、お許し下さい。何時御返事が出せぬ様に成るかも知れませんが、今後共宜敷くお願いいたします。毎日病床で、戦死した子供の写真や環礁を見ながら皆様の御健康をお祈りして居ります。

本年二月六日の
霊慰祭・定期総会・懇親旅行

例年の通り前日から三〇名の方々が九段会館に泊られ、本部役員が御迎えにまいりました。常連の方はもとより、はじめての方も、一年が待ちかねたほど、なごやかなお話がつきませんでした。今年は定期総会後直会として懇親旅行の予定がありましたので昇殿参拝を十時半に行いました。いつもながら本殿に昇殿し、英霊のそば近く参進したと直感したとき、あの艱難辛苦のあと故国の為め最期を遂げた肉親の様相が目の前にちらついて、生き残った我々生ある限り、その霊を慰め御冥福を祈らなければという真剣な気に打たれます。

あとの行事の都合もあって、本殿から退下してすぐ九段会館に移動し昼食後定期総会を開きました。一般関係は浮田副会長から人事並びに活動経過の報告、本年度の事業計画として現地忠魂慰霊碑の管理祭祀に遺憾なきよう現地官民との連絡を確保すること、会員相互の扶助、親睦を更にきめ細かく実行すること、機関誌環礁の刊行は続行したいとの説明があり、つづいて橋口常任幹事の会計報告、監事の監査報告があって、何れも全会員の御賛同をいただき、あと質疑応答が行われて総会を終り解散しました。

その後懇親旅行に参加の五十名は九段会館前から国際観光の好意による最新の大型車に乗車し東名高速道路を経て三島から左折して予定の修善寺温泉水月ホテルに泊り、翌七日伊豆、箱根のスカイ・ラインを縦横に走り、好天に恵まれてのドライブを楽しみ、午後四時東京駅を経て九段会館前で解散しました。

◇

懇親旅行は出発から解散まで、長時間の進行は、佐藤常任幹事の御得意の腕前で進められましたが長いバスの旅もホテルの一夜も本当に楽しみの中にいつの間にかたってしまいました。

水月ホテルで一風呂浴びて後の直会では、北は東北の、そして、南は鹿児島のと各地の民謡ののど自慢、岡野監事夫妻の玄人はだしの、様々の奇術いずれも拍手大喝采、なごやな雰囲気夜の更けるのも知らず楽しく過しました。

肉親の英霊方にもお喜びいただけたことと思います。参加全員の方から大変お喜びいただけたことと、御帰宅後本部によせられた多くのお手紙は口を揃えて来年も懇親旅行を計画するようにとのことでした。

◇高見沢ご一家から

初春の候、皆様お変りなく、御過しの事とお喜び申し上げます。

山国の信州では春はまだ遠い様に感じます。我々慰霊祭に参加の際は、何かと御親切にして頂き心から感謝しております。

高見沢さん達とバス

我々は遠くに居りますので、役員の皆様方に、ご迷惑をおかけするばかりで、何のお手伝いも出来ず深くお詫び申し上げます。

参加して見て想像以上に皆様が御苦労されていることが、手に取るようにわかりました。そのうえ旅行にまで連れて頂き本当にありがとうございました。

生れて二十数年間、父がもしこの世に生きていてくれたら、どんなに良かったろうかと思い通しでした。心の底から苦しい、そして悲しい思いを味はいました。しかし結婚もし、子供にも恵まれ、靖国神社へ家内、子供をつれ、三人揃って、父に見てもらうことが出来、何ともいえない喜びでした。

旅行中バスの中で軍歌を聞き、又皆様とお話をするとき、今までの様な張りつめた気持は消えて、皆同じ思いの人達ばかりなのだと思い胸を一ぱいにして、父を偲ばせていただきました。

子供を失った父や母、兄弟を亡くした兄と妹、父を亡くした子、そしてかけがえのない夫に先立たれた妻達が一台のバスに乗って、亡き人を思いながら旅行をするなんて我々には最高の時でした。この人達の身内と、私の父とが同じ島で同じ海で戦ったのかと思うと一人一人のお顔が忘れられません。これからも是非続けて下さい。

役員の方々には御苦労をおかけして申しわけありませんが、もし名簿（会員簿）をつくられましたらお願い致します。

そうすれば、これからは遺児も大勢参加して、いつまでも供養のあとつぎができると思います。

御礼状が遅くなったことを、お

修禅寺にて

詫びし、役員の方々の御苦労を感謝し、ますますこの会の発展を御祈りいたします。

高見沢一夫
同　宣子

懇談

岡野監事の手品

拝啓　先日子供達が上京の際は大変お世話になりました。私病気のため子供夫婦と孫に行ってもらい、亡き夫も、孫にあえて、さぞ喜んでくれたことと思い、私も家に居りましてうれしく思いました。子供達もとても楽しい二日間を過し、皆様に御親切にしていただいたとか、本当にありがとうございました。又本日はウォッゼ島の写真を送って下さいましてありがとうございます。これが主人の住んだ島かと思い、主人に会ったような気が致しましてうれしく、悲しくただただ胸のつまる思いでございました。

役員皆様の御苦労がよくわかりただ感謝のほかありません。

高見沢　およう

徳島市　大寺綾子

この度は靖国の慰霊祭及び懇親旅行重々お世話戴きまして誠にありがとうございました。よいお天気で暖く、全国の方々との旅行、聞く事、見ること、めずらしく誠によい旅行でありました。感謝感激で家に帰りました。みんなに、沢山のみやげ話をしてよろこんで戴きました。

長男が、お母さんが出席できなくなったら息子が、次は孫と何時までも、この会は続くだろうと申しておりました。何時までも何時までも続きますようお祈りいたします。八日に無事帰りました。

新潟県　高林セキ

先日は慰霊祭、懇親旅行につきまして誠にお世話様でございました。去る十一日雪の新潟に帰ってまいりました。私にとっては、この二月六日英霊に逢うことが何よりの楽しみ、そして生き甲斐の様な感じが致します。又英霊（亡き主人）も、靖国のみたまとなって待って居られることと思います。これもみな役員の方々のお心づかいがあればこそ、実現出来るもので感謝いたして居ります。それに此の度の懇親旅行。こんなにも楽しい旅行は有りませんでした。全国からのこの集い、でも英霊を思う心は皆一つというより外ありません。バスの中で私が歌った「今日のよき日のこの集ひ……」。安藤さんが「その歌を書いて下さい」といわれたで「はい」と書いて上げました。何かれと心は一つに結ばれます。まだ頭の中には皆さんのお顔、楽しい旅行のことで一杯です。お世話でも来年もまた是非旅行（直会）をお願い致度く存じます。

事務局から――今年ははじめての旅行のため、見当がつかず、五十五人と制限し、それ以上であったらお受けできないとしたため遠慮された方が多かったようです。来年は制限しませんので多数御参加をお待ちいたします。

第6期決算報告と昭和45年度予算

マーシャル方面遺族会

第6期決算報告書（自44. 1. 1 至44. 12. 31）

1　収　入	
前期より繰越金	499,154
会費収入(43年度分)	500,000
会費収入(44年度分)	775,000
会費収入(次年度分預り)	188,300
寄附金	1,269,429
受取利息	43,145
雑収入	321,585
預り金	121,500
収入計	3,718,113
2　支　出	
現地慰霊碑建設費	190,155
事務用品費	29,756
印刷費	258,191
刊行費	266,571
会議費	25,200
運営費	549,695
通信費	130,244
定期慰霊費	60,915
事務所借用費	113,547
振替払込料	60,465
雑費	7,575
支出計	1,692,314
3　次期繰越金	2,025,799
内訳　定期預金（富士・祐天寺）	1,000,000
普通預金（〃　〃）	979,839
振替貯金	29,894
現金	16,066

昭和45年度予算

1　収　入	
昭和44年度より繰越	2,025,799
会費収入	750,000
寄附金	1,000,000
受取利息	50,000
雑収入	100,000
収入計	3,925,799
2　支　出	
慰霊費	80,000
運営費	1,000,000
刊行費	300,000
印刷費	400,000
通信費	200,000
事務所借用費	140,000
振替払込料	60,000
事務用品費	40,000
会議費	25,000
雑費	10,799
予備費	170 000
現地慰霊碑維持基金	1,500,000
支出計	3,925,799

寄附者芳名

（四一一名）

毎回本誌上御芳名を掲げ御礼申上げておりますように、今回も左のとおり、多数の篤志会員その他や会員の皆様から多額の御寄附をいただきました。厚く御礼申上げます。ここに掲げました方々からは、この外に四十四年度迄の会費は全部いただいております。中には四十五年四十六年四十七年と先々までの分をお送り下ったものもあります。特に東京都共同募金会からは今回を含め五十万円にのぼる多額の御寄附をいただきました。本誌を通じ厚く御礼申上げたいと存じます。

「会員便り」から会員皆様のお喜びいただいて居る御様子や、寄附者芳名の実績によってわかる経済的の御協力の実情を見て、会長はじめ役員一同大いに張り合いを感じ、創立当時樹てた本会の目的を長く貫くよう、一層努力をつづける覚悟でございます。今後共お力添えをお願いいたします。

（昭和四四・一一・一から昭和四五・五・三一までに入金した分）

寄附額　芳名（敬称略）

篤志会員その他

一五〇〇〇〇　東京都共同募金会殿
四〇〇〇　三橋　孝殿
三五〇〇　吉原　徳蔵殿
三〇〇〇　金子　英郎殿
〃　鈴木　英殿
二〇〇〇　嘉村　栄殿
〃　志賀　淑雄殿
〃　土屋　太郎殿
一三〇〇　十二　徳二殿
一〇〇〇　三角　芳貞殿
〃　赤松　光殿
〃　井上　義雄殿
〃　江源　源次殿
〃　大幡　幸吉殿
〃　木下　甫殿
〃　成田　喜代治殿
〃　成宮　芳三郎殿
〃　松平　永芳殿
〃　吉井　初子殿
〃　珊瑚会殿
五〇〇　城家　平太郎殿
〃　寺岡　謹平殿
〃　保田　昌宏殿

◇北海道

三〇〇〇　父　高橋　直助
二〇〇〇　妻　田村　ヨシ
一五〇〇　母　鈴木　トミ
〃　兄　田村賢治郎
一〇〇〇　妻　尾崎　キエ
〃　妹　岩川あい子
〃　母　石垣　誠一
五〇〇　宮前ハツエ
〃　犬伏　隆
〃　母　金子　きよ
二〇〇　母　藤田　ヨシ
〃　長女　伊藤　フジ

◇青森県

一五〇〇　妻　工藤　ハナ
一〇〇〇　父　田中孝太郎
〃　姉　伝福　ちゑ
五〇〇　母　音喜多ミチヨ
〃　母　田中　ロク
〃　母　天坂　つや
〃　長尾　勝義
〃　妻　本堂　テフ

◇岩手県

一〇〇〇　母　刈屋さをみ
五〇〇　妻　菅原キク子
一〇〇〇　妻　平形いせこ
五〇〇　妻　松木　孝子
〃　新田富美子
〃　父　木皿外平治
〃　母　佐藤　けん
〃　兄　松浦　広雄

◇宮城県

四〇〇〇　母　熊谷サダヨ
一〇〇〇　長男　伊藤　重徳
〃　千田　豊作
〃　母　時田　セキ
五〇〇　小室舜司郎
〃　兄　作藤　銀蔵

◇秋田県

一〇〇〇　妻　大泉　時子
五〇〇　母　青野はつよ
〃　小野田ヨシ
〃　妻　丹野　アサ

◇山形県

三二二（戦歿者）吉津　武
二〇〇〇　母　皆川　タツ
一〇〇〇　母　堺　ヤキ
〃　女長　斉藤ミチ子
〃　妻　吉田　ハル
五〇〇　姉　江尻　キヨ
一七八　妻　吉津みどり

◇福島県

四五〇〇　父　椎谷　武雄
三〇〇〇　妻　藤田　ヨリ
二〇〇〇　父　山田　清
一〇〇〇　青木　謹次
〃　妻　佐藤　フジ
〃　姉　米田　チエ
七〇〇　姉　鮫島みさを
五〇〇　兄　阿部　文吾
〃　妻　小川すみ江
〃　坂井　繁男
〃　妻　高林　セキ
〃　高橋　梅子
〃　父　高野　仙吉

◇新潟県

二〇〇〇　父　松本　勝一
一〇〇〇　父　青柳　泰蔵
〃　父　飯塚　義雄
〃　父　遠峰　軍治
〃　母　宮内　はつ

◇茨城県

二〇〇〇　母　西倉　ヨシ
一〇〇〇　母　植木　モト
五〇〇　父　大山　藤太
〃　母　神山　さく
〃　弟　菊地　彦亘
〃　母　小舘　ヒサ

◇栃木県

一〇〇〇　母　三好さとる
五〇〇　妻　泉谷　スミ
〃　妻　滝沢謹次郎

◇群馬県

三〇〇〇　妻　志村　マツ
二〇〇〇　母　新井　のぶ
一〇〇〇　弟　鯨井　久八
〃　秋山　正行
〃　父　幸島　敬資
〃　妻　志村　マツ
五〇〇　弟　島田　章一
〃　妻　浅野　ちか
〃　兄　小暮　長一
〃　妻　小谷中せい
〃　弟　山藤　茂
〃　父　石川　惣蔵

◇埼玉県

一五〇〇　長男　桜井　正一
〃　桑田　忠蔵
〃　兄　仲田　正義
〃　坂本　喜美
〃　姉　加瀬　よし
〃　叔父　実川　福松
一〇〇〇　妻　岩佐とみ子
〃　妻　浄永　孝
五〇〇　父　太田　平治
〃　母　小路川きみ
〃　妻　佐藤　静江
〃　父　鈴木　良助
〃　鈴木　うめ
〃　妻　高安　こと
〃　妻　谷沢　英子
〃　兄　丸橋　一郎

◇東京都

一〇〇〇〇　母　橋口キクエ
〃　母　水野　はな
九五〇〇　母　木村　ちよ
五〇〇〇　兄　浮田　信家
〃　妻　佐竹　エス
〃　妻　国松ふみ江
四〇〇〇　妻　小泉　文江
三五〇〇　弟　黒川　誠一
〃　妻　佐藤　宗丕
二〇〇〇　弟　間々田やす
〃　妻　伊勢　昭男
〃　父　市川　シズ
〃　母　小畑　正一
〃　母　杉浦　しげ
〃　兄　内海　軍三
〃　父　長久保泰三
〃　妻　芳賀タツエ
〃　母　吉田　いそ
〃　妹　宇田川ひさ
〃　妻　荒井　福栄
一九〇〇　長男　井上　賀雄
一五〇〇　弟　佐々田良二
〃　妻　原口　シエ
〃　母　吉田やよい

◇千葉県

一一五〇
一〇〇〇　〃　母　木間　マツ
〃　姉　中田　テル
〃　母　江間　幾代
〃　兄　江本　一枝
〃　母　岡本　リヨ
〃　母　梶原　ノブ
〃　母　斉藤　貴美
〃　妻　斉藤　ハナ
〃　妻　鈴木つな子
〃　妻　菅沼　清子
〃　妻　中村喜久代
〃　妹　小山キミ子
〃　妻　中田　わか
〃　妻　中村みさを
〃　弟　昼間　楽平
〃　妹　松岡　巌
〃　妹　増山美代子
〃　母　宮地　つや
〃　長男　山中　健征
〃　母　吉田　せい
〃　妻　六軒つる子
五〇〇　〃　糸川　カネ
〃　父　及川　什二
〃　兄　加藤　富義
〃　母　小泉　タケ
〃　妻　斉藤　幸江
〃　母　鈴木　シズ
〃　妻　菅谷　千代
〃　兄　出口　スエ
〃　兄　並木　多重
〃　兄　松井　直一
〃　母　若松　キエ
〃　母　伊藤　ハナ
〃　妻　岩浪きよ子
〃　妻　宮崎　イト

◇神奈川県
三〇〇〇　姉　沖立　キヨ
二〇〇〇　妻　相田　智江
〃　母　助川与富子
〃　妻　津久井艶子
一五〇〇　妻　大石　豊子

一〇〇〇　〃　妻　中村　サダ
〃　妻　稲村　かつ
〃　兄　大槻惣一郎
〃　母　小林　キミ
〃　妻　斉藤　リウ
〃　妻　佐藤　登志
〃　姉　田沢　廉子
五〇〇　母　石渡　ムメ
〃　妻　伊沢　ヤス
〃　妻　佐藤　貞子
〃　妻　篠塚　タメ
〃　弟　鈴木　孝輔
〃　父　鈴木　舜
〃　妻　田中　トメ
〃　姉　平松　菊枝
〃　長女　福島　レイ
〃　母　川名　福松
〃　母　向江　ナカ

◇山梨県
四五〇〇　父　黒川　孝平
二〇〇〇　母　藤原　とじ
一五〇〇　母　高柳　悦子
一〇〇〇　妻　望月とよ子
五〇〇　妻　星野うめ子

◇静岡県
三〇〇〇　妻　土屋まさ子
二五〇〇　母　大高　吉郎
二〇〇〇　母　清水　ひさ
一五〇〇　母　米倉　ぬい
一〇〇〇　母　稲村　いと
〃　父　勝又　良蔵
五〇〇　妻　深見　助一
〃　父　石川　けい
〃　妹　大川　亀次
〃　兄　勝谷　米子
〃　兄　平野　董
〃　母　前田　かね
〃　平井　日蔭

◇富山県
三〇〇〇　母　柵橋　ちよ
一〇〇〇　妻　本多喜久江

五〇〇　母　矢野　しげ
◇石川県
二五〇〇　姉　大島　か乃
二〇〇〇　姉　高畠　芙容
〃　二女　横浜　福居
五〇〇　妹　吉光　澄子
〃　母　三輪　つげ

◇福井県
一〇〇〇　兄　水谷　義雄
〃　兄　柳沢　清信
五〇〇　父　堂東　秀
〃　妻　鳥羽　春枝
〃　母　松井　リユ
〃　妻　三反崎民子

◇長野県
二〇〇〇　妻　伊藤ますの
〃　妻高見沢およう
一〇〇〇　妻　岡島みね子
〃　兄　林　広
五〇〇　兄　牧内　長逸
〃　母　鮎沢千代子
〃　妻　鎌倉さかよ
〃　兄　勝野仁一郎
〃　兄　関　由高
〃　妻　堀内　美江
二七五　母　末松すみへ
二〇〇　父　稲葉　穂作

◇岐阜県
二〇〇〇　兄　渡辺　三三
一〇〇〇　母　寺沢喜美代
〃　妻　鳥本みさを
五〇〇　兄　戸田　数雄

◇愛知県
三〇〇〇　妻　川越　コウ
二〇〇〇　妻　山田　あき
一一二五　妻　吉田ひさ子
五〇〇　母　池山　くわ
〃　母小山内小美賀

◇京都府
一五〇〇　母　柴田　さく
〃　妻　中根　杉子

一〇〇〇　〃　妻　稲積　や江
〃　母　小林　さと
〃　妻　長谷川田鶴
〃　妻　八木　きよ
五〇〇　妻　加藤　すぎ
〃　妻　高崎　シズ

◇大阪府
二〇〇〇　母　大橋　いゑ
〃　母　安井　文子
五〇〇　父　栗巣弥一郎
〃　父　橋本八五郎

◇兵庫県
五〇〇〇　母　枝光　たい
二五〇〇　妻　江坂　富子
二〇〇〇　母　清水つちゑ
〃　父　瀬川　英治
一〇〇〇　母　林　いち
五〇〇　妻　藤田しげ子
〃　長男　安福　道明
〃　妻　山野いくゑ

◇奈良県
一〇〇〇　母　谷口　スエ
五〇〇　妻　安居　美子

◇和歌山県
一〇〇〇　妻　山中　フジ

◇島根県
二五〇〇　父　伊勢　竹市
一五〇〇　父　下地　政市
一〇〇〇　妻　木村　久子
〃　妻　松下　綾子

◇岡山県
一五〇〇　母　岡　佐免
一〇〇〇　母　本田　晴恵
五〇〇　妻　宇山　アサ

◇広島県
二〇〇〇　妻　原　志津枝
一五〇〇　妻　植田　操
五〇〇　兄　石田　史郎
〃　妻　川西シヅコ
〃　妻　小林アヤ子
〃　妻　寺内八千代

〃　父　浜本　米一
三〇〇〇　妻　大年ミユキ

◇山口県
二一二五　妻　内富みつよ
二〇〇〇　母　原田　ミト
一五〇〇　妻　児玉　富子
〃　妻　嶋田　チヨ
五〇〇　母　野村　ヨネ

◇徳島県
五〇〇　兄　峯野　英男
〃　妻　山口シゲコ

◇香川県
五〇〇〇　長男　秋山　正清
二〇〇〇　母　田中ヤスエ
一〇〇〇　母　奥田　マス
〃　妻　富田トシ子
〃　父　久森　俊一
五〇〇　母　富家　ツ子
〃　兄　平井　正夫

◇愛媛県
二〇〇〇　妻　清水　朝美
一〇〇〇　父　長岡　楽三
〃　母　西　サクノ
七二五　母　三好　勝子
五〇〇　兄　魚田　清明
〃　父　裏田　咲蔵
〃　妻　小西アキヨ
〃　父　新谷　房男
〃　母　松本ミチル
〃　兄　山本　峯子
〃　兄　渡辺　義雄
〃　妻　渡部　とみ
〃　父　渡部　米吉

○高知県
一〇〇〇　父　馬場　福義
五〇〇　母　倉本　朝衛
〃　妻　田中　百合
〃　母　平井　継
〃　父　山脇　力馬

◇福岡県
三〇〇〇　妻　広田ヨシ子

二〇〇〇　兄　楊木孝二郎
一五〇〇　母　徳王好子
一〇〇〇　母　片山カヅヨ
〃　妻　柴田ヤエ子
〃　弟　栗原康雄
〃　妻　深川芙由
〃　母　峯シマ
〃　妻　村山キヨノ
五〇〇　母　阿部かつよ
〃　父　岩崎関次郎
〃　母　緒方ミサヲ
〃　母　片山キク
〃　妻　甲斐イシ
〃　兄　倉元鹿之助
〃　兄　平山輝夫
〃　三男　三坂茂
〃　妻　森キヨ子
〃　父　森田伊助

◇佐賀県

一〇〇〇　母　坂本トセ
〃　兄　牛島辰巳
五〇〇　母　大久保きぬ
〃　母　金子セノ

◇長崎県

二〇〇〇　妻　松尾フサ
一五〇〇　妻　安達シヅヨ
〃　父　板浦弥一郎
一〇〇〇　父　毛越安五郎
〃　妻　原田虎男
〃　妻　前田フサ
五〇〇　母　斉藤ミ子
〃　父　斉田初夫
〃　父　橋半太郎
〃　妻　広瀬カツヨ
〃　母　久村キマ
〃　妻　平田利子
〃　妻　福田音和
〃　妻　森川チノ

◇熊本県

一五〇〇　妻　釜賀キクエ
一〇〇〇　妻　塚野ヨシ子
〃　父　山部貢
五〇〇　妻　今村コメ
〃　父　岡辰次郎
〃　妹　山中ヤエ子
〃　弟　安永嘉彰

◇大分県

三五〇〇　姉　野田雅子
一〇〇〇　妻　湯朝アキノ
五〇〇　母　木村ハナ
〃　母　石塚文子

◇宮崎県

一〇〇〇　母　杉田ヨシノ
〃　妻　森フサエ
五〇〇　妻　児玉チン
〃　母　外山ヨシ
〃　母　野別ヒナ

◇鹿児島県

二〇〇〇　妻　村上ノキ
〃　父　今村市太郎
〃　妻　染川とめ代
〃　長男　丹村修
〃　妻　徳重ミツネ
〃　妻　森テル子
五〇〇　母　塗木エイ

◇沖縄県

七八三　父　名嘉山全財
七八二　長男　金城要吉

訂正　前号寄附者芳名中長崎県の太田熊平は太田熊市の、鹿児島県の田中清助は田口清助の誤です。謹しんで訂正致します。

事務局だより

○新篤志会員紹介

皆様御承知のとおり本会篤志会員は会の創立或はその後あらゆる面での御協力をいただいている方ばかりですが、この度又左の方々に篤志会員を委嘱いたしました。

1　ケイス・エス・ウイリアムズ氏(Keith S. Williams)。同氏は篤志会員土屋太郎氏の御紹介によって、本会創立当時から本会のためお力添え下され、特に本会から派遣員を現地に送ること、最初に霊砂をクェゼリンから送付をうけたことは全く同氏のお力添えによるものでした。本誌10頁にのせた同氏の書簡により更に会員の一員に加はりたい旨の申出がありましたので早速委嘱することにされました。

2　徳原勇氏徳子様御夫妻

徳原夫人は本会派遣員が出発前からマジュロ島にあった方、派遣員の現地派遣中は事細大となくあらゆる便宜を供与され、又現地建碑の際は米国との間に立ち尽力して下さり、今日なお現地にあって墓守をして下さっております。二ヶ月とあけず、本会に御連絡下さり、写真に写して近況をおしらせ下さっています。

○クェゼリン島ミラー司令官異動の噂さ

徳原さんのお便りに「ミラー」さんはこの八月末本国に転任されるそうです。慰霊碑の梱包を埠頭まで迎えて下さってから、建立完了まで、あらゆる便宜を与えられたミラーさん、そしてその後の祭祀にも常に好意せられた司令官、しかも彼自身クェゼリンが大変好きで、あと二年任期の延長を望まれたそうですのに大変残念に思います。新司令官もまた、ヒーレー、ミラー両司令官のようによい方であるよう祈っています」と。

○慰問団長の御遺族

環礁11号で昭和18年1月クェゼリンに慰問団の訪れた記事があり団員の氏名も掲げられた。所が早速赤松光様から団長嶋田氏は戦後都内で病歿されたが未亡人のお名前と現住所をお知らせ下さったので関係環礁をお送りした。御遺族が大変喜ばれたことを御報告すると同時に、この様にお気付のことがあったら、事務局にお知らせ願うようお願いしたい。

○環礁第一集（合併号）頒布

本誌11号の事務局だよりに予告いたしました環礁1号から10号までの合併号環礁第一集が出来上りました。表紙は環礁のスケッチをとり入れ、船が環礁の十八キロ位に近づくと、紺碧の海の水平線上に点々として目が覚めるような緑の椰子林が見え、緑と紺碧の境に白砂と白波が太陽に照らされて真白な境界線となる様子を絵にしたもの。一頁はクェゼリン島に建立された忠魂慰霊碑のカラー写真、二頁は本会の沿革、三頁は、一巻から十巻に至る島別の戦記、現在、地方誌の目次です。

代価は一冊送料を含め五〇〇円でお頒けしています。代価と共に御注文下さればすぐお届けいたします。

○全国戦歿者追悼式参列希望者に

毎年八月十五日東京武道館で、全国戦歿者追悼式が行われます。本会にも御案内をいただいておりますが、まだ参列なさったことのない方で御希望の方は本部宛御知らせ下さい。今年は或いは間に合わないかもしれませんが来年以後に手続をとります。

○靖国神社みたま祭に本会の大型献灯奉納

例年の通り七月十三日から十七日まで靖国神社社頭に大型の献灯を奉納し、英霊の御冥福を祈ります。期間中ご参拝の方は是非御覧下さいますよう御願いします。

○会費未送金の方へのお願い

昭和43年の定期総会の決議によって、同年から本会は会費制とし年五〇〇円の会費を集め、これで運営して行くことになりました。それ以来本会の運営は順調に進んでおりますが、お忙しい方や、お年寄りで、ついその記事を、お読み洩しのため未納になっている場合があります。このため本号にはこれらの方に振替用紙を同封致しましたので、お調べの上よろしくお願い致します。

なお御参考までに、会費制になりましたのと同時に、すべての御送金に対し領収書をお送りしておりますが、寄付者芳名欄には会費の外に寄付金をお送り下さった方だけ寄付額と芳名を掲載することに致しておりますので、御承知下さい。

本部
郵便番号一五四
東京都世田谷区野沢
三丁目十一番三号
マーシャル方面遺族会
電話(東京)四三一三六一四番